



# 「主体を鍛える」

(ローマ書四・一―五)

校長 高柳富夫

パウロはユダヤ教徒として、ユダヤ教の律法を忠実に守ることに由る義をひたすら追究していた人でした。人が神の前に良しとされるのは、律法を守り行い、割礼を受け、ユダヤ人として生きること以外にはないと考えて疑わなかったわけでした。

しかし、そのパウロが、イエス・キリストに出会って一つの真実に覚醒しました。その真実とは、人が神の前に良しとされるのは、もはや律法を守り行うことによるのではなく、ただ信仰によるということでした。

しかも、その信仰とは、突き詰めて行けば、イエス・キリストを信じるワタクシの信仰でもなくて、信仰の真の主体は、イエス・キリストご自身であるということでした。人が神の前に良しとされる

のは、律法の行いによるワタクシの義でもなければ、イエス・キリストを信じるワタクシの信仰でもない。人が神の前に良しとされるのは、実にイエス・キリストご自身の信仰によるのだ。これが、パウロが覚醒した真実でした。

そのことをパウロは、ピステイス イエスー クリストウー「イエス・キリストの信仰」、あるいは正確には「イエス・キリストの信」という言い方で、繰り返し表現しています。ですから、佐藤研氏が言われるように、パウロ神学の核心は、良く言われる信仰義認でさえもなく、義認信仰であるということになります。

つまりパウロ神学の真髄を捉えるには、信仰義認ではまだまだ不十分ということ。信仰義認という捉え方では、律法遵守を救いの条件とする

律法主義を克服できても、信仰を救いの条件とする信仰主義を克服することはできないのです。

ワタクシの信仰によってではなく、イエス・キリストの信によって、この信仰のないワタクシが、神の前に良しとされることを信じるということ。それがすなわち義認信仰です。

今日のローマ書の言葉は、創世記一五章六節の言葉ですが、パウロは義認信仰の根拠として繰り返し引用しています。

しかし、この言葉は、注意深く読みませんと、その革新的な本質を曖昧にし、パウロが覚醒した義認信仰の真髄を、限りなくぼやかしてしまいません。アブラハムは神を信じた。その信仰が神によって義とされたと言われているのではない。そうであるなら、やはりアブラハムの信仰による義、すなわち信仰義認ではないかと、そのように思い違いをしてしまうことになるのです。

パウロが言いたいことは、そのようなことではありません。五節に注目する必要があります。パウロははっきりと「不信心な者を義とされる方を信じる」と言っているのです。

つまり、ここで言われている「アブラハムの信仰」の本質とは何かを注意深く考えて見なければならぬのです。ここで言われている「アブラ

ハムの信仰」の本質とは、「不信心な者を義とする神を信じる」ということなのです。決して、「信じる者」「信仰ある者」「信仰を持つ者」を義とする神を信じるというのではありません。そこが重要なポイントです。

神とは誰か。神とは「不信心な者を義とする、不信心な者を良しとするお方である。」つまり「信仰のない者を、信仰のないままに良しとしてくださるお方である。」神とはそのようなお方であると信じる。それがここで言われている「アブラハムの信仰」の本質です。

「不信心な者」「信無き者」とは「神無き者」と言い換えてもよいでしょう。神は「神無き不信心な者を、そのまま、まったくの無条件に良しとして生かしてくださるお方である」。神とはそのような徹底した義認を行われるお方であると信じる。そのような神に信頼を置いて生きる。それが、パウロが覚醒した義認信仰の真髄であり、核心です。

しかしここで、一つの大きな問題が起こって参ります。それは、パウロが根拠としている創世記一五章六節の言葉は、誰が読んでもパウロが読んだように読むことができるのかという問題です。

「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」(新共同訳) 少なくとも

七五歳を超えて子どもいらないアブラハムに、神は数えきれない星の数ほどの子孫を約束した。アブラハムは神の約束を信じた。そして、神はそのアブラハムの信仰を義と認め、良しとされたと言っています。

ところが、岩波版の創世記、月本昭男訳は同じ六節を「彼はヤハウェを信じた。そして彼は、それが自分にとって義しいことだ、と考えた。」と訳しています。新共同訳とは明らかに異なります。

つまり、パウロが義認信仰の本質を根拠づけるために引用した創世記の言葉は、神がアブラハムの信仰を義と認めたと読み取ることができるし、アブラハム自身が、神の約束を信じるのが自分にとって義しいこと、最善のことだと認めた、という意味にも読むことができるということ。すなわち、原典は両方の読みが可能です。

パウロがヘブライ語本文の両方の読みを知らなかったはずはないであろうと思われまします。しかし、パウロはこの言葉を「アブラハムは神を信じた。神はそのアブラハムの信仰を義と認められた」と読んで、繰り返し引用し、義認信仰の根拠として示し続けました。

ここに、パウロが格闘して鍛え抜いた「パウロの主体」があります。神とは誰であるのか、神の前に生きる私とは誰であるのか、そのことを問

い続け格闘し続けて鍛え抜かれたパウロの主体が、この読みを選択させたのです。これは決して、主観的、独善的、身勝手、思い込み、作爲的、恣意的といった言葉で非難することはできない選択です。パウロの鍛え抜かれた主体的選択、主体を鍛え抜く選択が、ここでなされているということです。

誰もが信仰の父と賞賛して止まないアブラハムをさえも「不信心な者」と呼んで憚ることのないパウロの主体的決断がここにあります。「不信心な者を義とする神を信じる」というパウロの義認信仰です。

義認信仰に覚醒したパウロの鍛え抜かれた主体を示されて、私たちが自身の主体を鍛え、パウロが示す義認信仰の核心に、その本質に、私たちが自身も覚醒させられて行く者でありたいと、強く祈り願う者です。

信仰とは何か、聖書とは何か、教会とは何か、宣教とは何か、その他さまざまな神学上の諸課題を考える根源において、私たち自らの主体を、可能な限り鍛える歩みを進めて参りたいと思えます。そのような視点に立って、新入生と共に、切磋琢磨しつつ、試行錯誤しつつ、共に育つ神学教育の歩みを新しく始めて参りたいと願っております。  
(入学式メッセージより)

### 「新任講師紹介」



大谷 哲

今年度、古代中世教会史を担当する大谷哲と申します。農村伝道神学校に携わるみなさま、これからよろしくお願ひいたします。

私は一九八〇年生まれ、北海道旭川市の出身で、筑波大学を卒業してから東北大学の大学院文学研究科へ入り、古代ローマ史と初期キリスト教史を勉強してきました。特に、殉教者・告白者の教会内での地位、また殉教が発生するローマ帝国の法廷がどのようなものであったのかを説明することが研究の中心課題です。

趣味と言えほど詳しくはないのですが、時々推理小説を読みます。そして、反省すべきことではあるのですが、私の研究スタイルはとも推し小説的なのです。

私の母校東北大出身の作家である伊坂幸太郎さんのとある推理小説に、「君は、彼らの物語に飛び入り参加している」という印象的な言葉がでてき

ます。小説の探偵たちが会う事件の謎は、犯人や当事者にとつては何ら謎ではありません。ただ単に、見ている視点が異なるだけで、得られる事件の像が異なり、大きな謎が生まれてしまう。これは歴史研究でもしばしば起こることです。歴史上の「謎」の当事者たちが見た「事件」の側面をつなぎ合わせ、納得のいく全体像を描くことができたときの爽快感は推理小説よりも興奮するものがあります。

一見矛盾するような史料や学説は、私にとって大いに「飛び入り参加」したくなる「事件」です。

古代ローマ社会史の大家キース・ホプキンスも、奇しくも言っています。歴史をいかに書くかという問題を考えるときの最良の手引きは、黒沢明監督の映画『羅生門』だと(本村凌二他訳『神々にあふれる世界』岩波書店2003年、日本語版序文)。とある旅人がどのように死んだのか、映画の登場人物たちはまったく食い違ふ証言をします。自分の欲望と都合で証言を捻じ曲げる人々に、主人公である僧は人間の闇を見ますが、歴史家は人間が歪んだり誤ったりしている証言をしてしまうことを受け入れることから思考を

出発させます。同時に、その

食い違ふ証言を引き比べ、分析し、少しでも隠された事実に向かうと努力し続けます。古代中世教会史では、千年の時代を越え、ヨーロッパや中東にとどまらない地域へと広がるキリスト教会の活動を追いかけてながら、こうした歴史学的思考法とともに学んでいきたいと考えています。改めまして、よろしくお願ひいたします。



織田 信行

本年度、教義学を担当することになりました。授業が始まって二ヶ月が経ち、私自身にとつても新鮮な研鑽の日々となっております。これまでの不十分な学びのまま残していた事柄を改めて見つめ直し、学生の皆さんとの共同作業の中で、この時代に託せられている「福音宣教とは何か」について、授業を進めたいと願っています。

講義の流れとしては、初期キリスト教時代に告白された「基本信条」を聖書に遡りながら、光と影を宿しているその形成過程をたどり、宗教改革

以後の、特にドイツの「バルメン宣言」に至るそれぞれの時代に告白された諸信仰告白に触れ、終わりに、日本基督教団の「戦責告白」から学ぶべき重要な課題とは何か、という問いの中で、神論、キリスト論、教会論等の教義学の諸テーマに進んで行くことを目指しています。

今日までの私自身の歩について簡単に触れますと、七十年代に「大阪万博」を契機に「教団・東京教区・東神大問題」が起こり、その渦中にあつて、次第に東神大・教団の宣教、及びその神学的営為に深く疑問を抱くこととなり、私も「異議あり」の声をあげました。その後の教団教師試験実施の混乱が続く中で、信徒伝道者として東駒形教会での一年間の奉仕の後、恩師である井上良雄先生、諸先生の助けを得て、改めて学びの機会をドイツに与えられ、ヴッパータール神学大学に留学しました。帰国して、西中国教区の光教会に赴任。その後、鈴木正久教団議長時代に始まったドイツ福音主義合同教会との宣教協約に基づく教団派遣教師として、再び西ドイツへ。六年間の働きを終えて帰国しました。その後、東中野教会に着任、二〇一一年に退任。その間、障がいを負う人



びと・子供たちと「共に歩む」ネットワーク代表の青木優牧師が始められた調布柴崎伝道所での集会の奉仕をしながら今日に至っています。

「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ十六章十五節)との主の宣教命令は、「世に仕える教会」の派遣をこそ意味しています。農伝の神学教育のヴィジョンの中に、「農」にこだわりながら、諸問題を抱える現場を宣教の場としてとらえ、人間が生きる固有の現場から離れずに、教会の宣教を考える神学教育をおこないますとあります。

現在の教団の中での農村伝道神学校の今日的意義、福音宣教を担う伝道者養成の責任の重さを、今、私なりに受け止めつつあるところです。



金南昕

今年韓国語を担当することになりました金南昕と申します。

この原稿を頼まれた時、正直何を書けば良いのか悩み戸惑いました。

この学校との繋がりは殆どありませんでしたが、訪問したのは実は今回が初めてではありません。前回までこの学校で韓国語を教えていた盧さんとの繋がりとの中で一緒に訪ねたことがありました。行き方や周りの風景などまったく覚えてはいませんでしたが、こじんまりして古い感じの素敵な所だったと、微な記憶だけが残っています。

今学期の初日、辿り着いた学校は訪れた誰でもが穏やかな気持ちになれるような雰囲気です。私としてもほっとしました。また、バス停から学校までの道のりは自然がいっぱいでハイキングに出かけているような気分にならせてくれました。

私は子供の時から二〇代の半ばまで教会に通っていましたが、その時間は私にとって今でも一番忘れられない、貴重なものでした。教会での教えと、出会い、そして多くの人との交流はいくら時間が経っても心の中に消えることなく、刻まれています。様々な人生の悩みや痛みも教会を通してなんとか乗り越えることができました。悲しい時も落ち込んだ時も教会の友達や先輩がそばにいてくれたおかげで気

持ちは楽になりました。また、教会がきっかけとなり、日本への留学を決心しました。その当時、通っていた教会と東京のある教会は姉妹教会で交流が盛んでした。年に一回はお互いの教会を訪ねて交流を深めていました。そういう中、

私を含め何人かが東京の教会に訪ねる機会ができ、その訪問の期間中いろいろ教わり、いい勉強をさせてもらいました。それをきっかけに日本への留学を決心し、留学の間にはずっとその東京の教会にお世話になっていました。

現在はまだもう学生という立場ではなく、韓国語を教えるという立場で日本で働いています。今では日本での生活が中心となり、たまに故郷であるソウルに帰省するといった生活を送っています。

日本と韓国、近くて文化的にも深い関係を持つ両国です。様々な交流を通してお互いに尊重し合い、お互いに良い影響を与える機会がもっと増えることを期待しています。

私は韓国語という言語を通して皆様方に韓国の文化を少しでも紹介出来たら良いなと思っています。相手の言葉が分かれば一層視野が広がり、より交流しやすくなり文化理解にも役立つと信じています。

「新入生紹介」



井谷淳

波田教会より参りました井谷淳と申します。受洗して以来牧会者になる事に照準を置き信仰生活を営ませていただきました。大学卒業後、音楽を主なる生業としてきましたが、キリスト教理念の元に自己を律し、神の世界で用いられるべく自己研鑽の日々を送る為、農村伝道神学校の入学を希望いたしました。現代日本社会をとりまく様々な差別構造で苦しんでいる方々、社会の理不尽な構造性の中で孤立を余儀なくされている方が、自分自身を取り戻せる機会を果たす空間が教会であると私は感じております。

ネイティブアメリカンの諺にその人の靴を2か月履き終えるまで、その人物を裁いてならないとあります。問題を抱えている方の立場を理解し共に解決策をさがしてゆける牧会者に成るのが理想です。人を許し支えてゆくのは決して容易な事ではありません。ですが、是まで様々な人に支えられ、励まされ、許されて

きた自分にできる社会へのやさやかな恩返しであると感じています。様々な社会的立場の方、人種、性別を超えて共に理解し支えあえる教会形成の為、精進したゆきたいとおもいます。



表見聖

日本基督教団・平塚中原教会出身の表見と申します。クリスチャンホームで育ち、大学卒業後はスペインにてオルガン研鑽、教会専属オルガニストの職についておりました。帰国後は一般企業にて勤務しておりましたが、伝統的・保守的な観点からの聖書の学びに基づいた自身の信仰生活と現代の社会状況を顧みる時、聖書そして神学を多面的に勉強したいとの思いが募って参りました。そのような中、職場での人間関係の難しさに直面し、改めて自身の在り方、生き方を模索している只中、農伝に導かれ勉学の機会を与えて頂いた事に心から感謝しております。

多様性を受容している農伝での講義は、私にとり何にも代えがたい学びの一時となる

